千葉経済大学短期大学部
研究紀要　第５号　53～62（2009）
研究論文

音楽による異文化理解の方法に関する一考察

―「御柱・木遣り歌」実践者への面接調査より[1]―

桐　原　　礼

A Study on the Way of Understanding About Different Culture Through Music

-Based on the Survey by Interviewing to “Onbashira-Kiyariuta” Players-

Aya KIRIHARA

Abstract

The purpose of this paper is to examine the way of understanding about different culture through music. Examinees are three who has specific musical experiences, based on analysis of these examinee's recollection through hearing/seeing different music culture.

As a result the examinees improved awareness about various musical feature/context on their musical experiences and they understood about different music culture. And understood music culture: recognition about common/difference features of different music culture through recollection about own musical experiences.

On this study, deliberates the way of understanding about different culture through music is based on the awareness about own culture.

キーワード：世界の諸民族の音楽、自文化、気づき、音楽教育、異文化理解

１　はじめに

グローバル化に伴うモノや人の移動が加速化し、多文化共生社会を目前にした今日、異文化に対応していくための能力を備えていくことが現代的な教育課題である。異文化理解の教育とは、異文化への関心を高め、自他の文化への理解を深める学習を通して、文化的背景を異にする人々と共に学んだり働くことができる能力を養うことを目的としている。日常生活においてこのような人々との接触機会が少ない人々にとって、異文化に対応していくための力は、容易に身につくようなものではない。このため、実際に生活習慣や言語の異なる人々に対峙する場面に備え、準備学習をすすめていくことが急務とされている。このような中、音楽を通して異文化に対する理解を促進することが期待されている。音楽の中でも、特に、世界の諸民族の音楽について学び、文化的背景を異にする他者と文化が密接な関係にあることを知り、共感的な理解を示す経験を重ねていくことが、他者への受容へとつながっていくのではないだろうか。

世界の諸民族の音楽の教育的な取り扱いおよび異文化理解に関する教育的実践が最も多くみられるのは、学校音楽教育である。ここでは、世界の諸民族の音楽を教材とした学習のための理念的枠組みや実践の広がりが認められ、世界の諸民族の音楽を扱う場合、２つの分類が考えられる。一つ目は、世界の諸民族の音楽について、その音楽的な特徴や文化的脈絡について理解をすすめる場合である。これによって、児童生徒の音楽的な知識や技能を高めるような、音楽そのものの理解のために用いられる場合である。もう一方は、国際理解教育や多文化教育など、世界の諸民族の音楽を活用し、文化的背景を異にする人々への理解をすすめるために用いられる場合である。本研究は、この後者

に属すると考えられる。世界の諸民族の音楽を活用し、文化的背景を異にする人々への理解をすすめる異文化理解のための研究である。後者の学習、すなわち世界の諸民族の音楽を活用するためには、前者の音楽そのものの理解をすすめるための方法が用いられていると考えられる。この両者において、教材選択の観点や指導法には共通した部分が多く、双方の研究や実践の広がりとともに、それぞれの学習内容が発展し充実してきたと考えられる。また近年、アメリカ合衆国における音楽教育の理念を取り入れ、この両者を含めた概念として、多文化音楽教育という捉え方がみられるようになってきた[2]。世界の諸民族の音楽とは、世界の様々な国および地域において、その土地の人々によって育まれてきたものであり、人々の生活や価値観などが表れている。こうした音楽に触れることにより、自分たちとは全く違った行動や価値観を持つ人々の存在を知るとともに、自分たちが慣れ親しんだ環境にいる時には気づくことの出来ない自文化について浮かび上がらせ、それまでの自分のものの見方を変えていく機会を与えるという特性がある。音楽科教育においては、こうした特性をもつ世界の諸民族の音楽を扱った異文化理解のための研究（加藤、1993・2008）（内田、2000）・（谷、2007）や実践的な広がりがみられる。しかしながら、ものの見方を更新させたいとする発想はあっても、異文化にふれる作用としての心の動きに関する実証的な研究および理論的根拠は示されてきていない。

異文化理解の教育においては、異文化に触れることによって自己のあり方や生活を見つめ直し、ものの見方を更新させていくことが重要視されている（佐藤、2003）。ここでは、人は、それぞれの環境における文化的な意味体系を無意識的・選択的に自らの内に取り込んだ、文化的な存在であると考えられている（箕浦、1990・1997）。自らの内に取り込まれた文化的意味によって独自の内的環境を紡ぎだし、ものの見方や価値観、行動や感情などを規定していく。このため、異文化に接触した際には、自らの価値観や行動があてはまらず葛藤が起きたり、文化的背景を異にする他者に対する偏見を持ってしまうことが多くなる。実際に、言語や生活習慣など文化の異なる人々と関わっていくことが大変困難であることは、昨今の外国人とのトラブルや海外駐在員の過酷な心理状態を見れば明らかである。このため、異文化理解のあり方として、異文化に関する新たな情報を得るだけでなく、自文化への気づきによってものの見方を新たにしていくことが重要視されている（渡辺、2002）。自文化への気づきとは、自分自身の考え、価値観や行動などについて意識化することであり、これによって文化的存在としての自分について新たな見方をしていく、すなわち、ものの見方を更新し認知的枠組みを拡大していくことであると考える。これに基づき、文化的背景を異にする人々の価値観や行動などがどう自分と類似または相違しているかを認識し、他者に対する新たな見方につなげていく。異文化理解とは、異質なものを受け入れていく主体の認知的枠組みの拡大によって、他者への共感的な理解を目指していくことであると考える。異文化理解の教育においては、異文化を理解していく前提として、自文化への気づきを高めることを重要視していると考えられる。

ものの見方の変化は、例えば、カテゴリー幅の拡大や認知的複雑性のように説明することが出来る。カテゴリー化とは、外的刺激を感覚・知覚し必要なものに意味づけをしたのちに、個別の刺激をその同質性を基にグループ化する過程であり、情報処理と思考過程には不可欠なものである。カテゴリー幅とは、同一のカテゴリー内にどれだけの差異を許容するかということを示す。カテゴリー幅の狭い人の特徴は、違いに対する非寛容性である。文化の異なる人々と接するときも、ささいな相違にまで注目しやすく、排除の論理が働きやすく、できるだけ均質な仲間でまとまろうとする傾向がある。これに対し、カテゴリー幅の広い人は、違いに寛容であり、多少の違いがあっても仲間と見なす。このため、自分たちと彼らが全く違うというところから出発するのではなく、自分たちと共通点や似ている点が沢山ある、という部分を強調する。偏見や偏ったステレオタイプがある段階では、まずカテゴリー幅を

広くとるようにすることが有効である（小池、1999）と述べるように、「全く違う」ととらえているカテゴリーの狭い段階から、「自分たち同じところが沢山ある」というようにカテゴリー幅を広げることで、ものの見方を更新していくことが出来る。認知的複雑性とは、使用しているカテゴリーの数が少ないと認知的複雑性が低い、あるいは認知的に単純だと言うことができる。ある事柄に対してより多くのカテゴリーで認知した場合は、認知的複雑性が高い、あるいは認知的に複雑だと考えることが出来る。均一的にみるのをやめ、多様性に気づくようにする、すなわち、ステレオタイプに当てはめてみるのではなく、サブ・カテゴリーに細かく分類していく。サブ・カテゴリーを見つけていく作業において、自分たちとの類似点や相違点について気づくなど、より相手について詳細にみていくことを可能とする。認知的複雑性を高めることの有効性として、相手集団と自集団のサブ・カテゴリー同士に共通性が見つかり、交流が生まれたりと好意的な態度が生じ、最終的にはカテゴリーとしてではなく個人として見ることになっていくと考えられる。異文化に接触する際の課題であるカテゴリー化、ステレオタイプが内包する問題点を軽減するためにも、認知的複雑性、すなわち、一つの事象を認識するために多くのカテゴリーを使用して判断することが有効であると考えられる。

筆者のこれまでの研究（桐原、2005・2006）において、自文化および自国の音楽と何らかの共通点や類似点がみられる異文化の音楽の体験により、自文化（音楽的な表現や知識など）について気づきが促されることを明らかにしてきた。今後一層、音楽による異文化理解を促進していくために、一方法として、世界の諸民族の音楽に触れ、自分の価値観や行動、音楽表現などを見つめ直すなど、自文化への気づきを高めることによって、ものの見方を更新していくことが重要であると考える。自文化におけるものの見方や考え方、音楽的な表現や知識などに気づきを高め、それに基づき、異文化または異文化の音楽が、自分とどのように類似または相違しているか、などの判断をすすめていく。世界の諸民族の音楽による異文化理解とは、言語や生活習慣などの異なる人々への共感的な理解を上位のねらいとして念頭に置きつつ、文化的存在としての自分に気づきながら、他者との共通点や相違点を認識し、他者に対する新たな見方をしていくことである。こうした、自文化への気づきから新たなものの見方に至る内的な変化に着目することによって、異文化理解のねらいに到達するための道筋を明らかにすることが出来ると考える。

本研究においては、音楽による異文化理解の方法について明らかにするため、異文化の音楽にふれることによってどのような自文化への気づきがみられるのか、どのようなものの見方の更新に至ることが出来るのか検討したい。

2　研究方法

(1)　研究方法の概要

世界の諸民族の音楽には、それぞれの地域の人々によって長い間培われてきた、独自の伝統的な表現様式や音楽の土台となる社会的・文化的脈絡への理解をすすめることが重要となる。そこで、異文化にふれることによる自文化への気づきが明確になるよう、面接調査においては、自文化として日本の伝統的な音楽の知識や音楽的経験が認められる対象者を選定することとした。長野県松本市の「御柱・木遣り歌」実践者を対象とし、気づきを高める自文化（音楽的知識や音楽的表現）として、「御柱・木遣り歌」に焦点を当てることとした。

面接調査の事前に（2005年４月から５月）、対象者に共通した音楽経験である「御柱・木遣り歌」に関するフィールド・ワーク（祭り囃子実践者への聞き取り調査・祭り当日の観察）を行い、「御柱・木遣り歌」の音楽的な特徴や社会的・文化的脈絡について調査した。その後、対象者に対して、異文化の音楽の聴取・視聴を含む反構造化面接を行うこととした。異文化の音楽の聴取・視聴による、自文化としての「御柱・木遣り歌」への気づき、ならびにものの見方の更新について、対象者の発言の分析により検討することとした。

⑵　フィールド・ワークによる事前調査

－長野県松本市「御柱・木遣り歌」の背景と音楽的な特徴について－

松本平の御柱祭は、酉の年と卯の年に諏訪大社祭の翌年４月下旬から９月にかけて、里曳き、立て御柱などが行われる。松本市内の６つの神社で行われるが、このうち５つが山辺地区である。

フィールドとした長野県松本市里山辺地区の御柱祭は、須々岐水（すすきがわ）神社にて中世から諏訪大社と同様に行われている。フィールド・ワークを行った2005年は御柱祭本祭の年であり、５月５日、早朝より山辺９町会の青年層が中心となって二本の柱を神社まで運ぶ里引きが行われ、境内の建立場所に建立された。

「御柱・木遣り歌」はこの「御柱祭」に際して歌われるものである。御柱を山近くの安置場所から神社まで曳いて運ぶ際、途中休憩時に、酒を飲みながら余興として披露される。順番に各町会から一人ずつ出てくる場合や、飛び入りで歌う場面もあり、この地区で長く御柱祭を担ってきたシニア層から、本年度初めて皆の前で木遣り歌を披露する若者まで年代は幅広い。順番に一人ずつ歌われ、その他大勢が決まった掛け声で囃して盛り上げる。歌詞やメロディーが古くから（親子三代など）引き継がれたものもあれば、即興的にその場で歌われるものもある。練習は祭りの半年くらい前から行われ、各町会に存在する「木遣り師」と呼ばれる長年木遣りを歌い続ける熟練者から、祭を主に担う青年層が習う。練習時から酒を飲みながら宴会芸的

【御柱の里曳き(2005年５月５日、筆者撮影)】

【御柱の里曳き　(2005年５月５日、筆者撮影)】

に披露しており、この「酒と歌」が密接な関係がみられる歌であることが、「御柱・木遣り歌」の社会的・文化的脈絡として挙げられる。

音楽的な特徴としては、追分様式、独唱（多人数が合いの手のような掛け声を入れて囃す)、拍節感がない、無伴奏、こぶしが多い（メリスマ的な旋律)、男性の高い声で歌う、七五調の歌詞、出来事や物語を語るように歌う、メロディーは決まっているが歌詞は即興性が強い（昔から引き継がれた歌詞もあるが、時代風刺的な歌詞も多く歌い手が作る場合が多い）などである。

⑶　調査の手続き

＜対象者について＞

対象者は、「御柱・木遣り歌」の実践経験のある、松本市出身（現在も在住）29～30歳の男性、３名を選定した（以下、3名の対象者をA、B、Cと表す)。面接調査の直前に、対象者の「御柱・木遣り歌」に関する経験について調査した。対象者の３名とも、調査の約１ヶ月前に行われた「御柱祭」の担い手であり、各町会の連長（リーダーの意、年長とも呼ぶ）であった。３名ともこの地域に生まれ育ち、幼少より７年に一度のこの御柱祭を見たり、木遣り歌を聴いてきている。本年においては、「御柱・木遣り歌」の練習から祭り本番、打ち上げまでリーダー（「連長」、または「年長」と呼ばれている）をつとめた。歌の練習など祭りの準備から本番まで、人前で歌う経験を積んできている。（表１）

＜面接調査の手続き＞

2005年６月、松本市教育文化センターの一室にて実施した。一人30～40分程度の反構造化面接（音楽の聴取・視聴を含む）を行い、面接過程はMDに録音した。調査にあたっては、研究の主旨・録音すること・データは研究目的でしか使用しないことを説明し、了解を得た。

対象者が異文化の音楽を聴取・視聴しながら、「御柱・木遣り歌」の経験について想起が促されるよう、調査に用いた異文化の音楽は「御柱・木遣り歌」と共通もしくは似た音楽的な特徴や社会的・文化的脈絡を持つ異文化の音楽を選択した。「御柱・木遣り歌」と音楽的な特徴について共通性がみられるスペイン民謡より、２曲の聴取を行った。また「御柱・木遣り歌」の音楽の社会的・文化的脈絡について共通性がみられるインドネシア「ゲンジェ」（歌の宴会芸）の映像の視聴を行った。

・調査１　スペイン民謡（２曲）の聴取[3]

２曲とも、「御柱・木遣り歌」と音楽的な特徴について共通性がみられ、聴いた感じが「御柱・木遣り歌」と似ているため、対象者が自己の音楽経験として「御柱・木遣り歌」の音楽的な特徴を想起しやすいと予測した。具体的には、追分様式であり拍節感がないこと、無伴奏で独唱で歌われる、メロディーのメリスマが顕著にみられる、パルランド風スタイル、などが挙げられる。この聴取の際は、ほとんど説明を加えず対象者の感じ方を重視し、対象者が気づかなかった特徴などについてのみ説明を加えた。CDプレイヤーで１曲ずつ数回流し、曲が終わると対象者がメモをとる時間を取った。「御柱・木遣り歌」との共通点や相違点を挙げやすいよう、「似ている点・違う点」の枠が書かれた用紙を用意し、対象者がメモをとれるようにした。１曲ずつ「御柱・木遣り歌」との共通点・相違点とその理由について質問し、より具体的な情報を引き出すようつとめた。また対象者が音楽用語が分からない場合などは、筆者が用語を挙げたり、必要に応じて用語の説明をした。

・調査２　インドネシア「ゲンジェ」（歌の宴会芸）[4]の視聴

音楽の土台となる社会的・文化的脈絡、特に音楽の意味合いが「御柱・木遣り歌」と似ているため、対象者が自己の音楽経験である「御柱・木遣り歌」の社会的・文化的脈絡や意味合いなど様々な要素を想起しやすいと予測した。具体的には、歌の宴会芸であり娯楽的要素が強いこと、大勢で酒をくみかわしながら歌うスタイル、などが挙げられる。しかし＜ゲンジェ＞の映像を視聴しただけでは「共通」「似ている」と感じるのが困難なため、まず映像を見ながら「歌の宴会芸」であることや「椰子の酒を飲みながら歌っている」情景、「田仕事の後の皆の娯楽」であることを説明した。この際、対象者が自己の音楽経験を想起しやすいよう、共通点や相違点について読み取るためのいくつかの語句（宴会芸、自己表現、気持ち、コミュニケーション、評価）[5]を用意し、対象者は映像を見ながらこれらの語句を手がかりとした。ノートパソコンで映像を数回流し、対象者の発言に沿って繰り返し同じ場面を流すなど、対象者の自発的な発言を促すようつとめた。

＜分析の手続きと分析の視点＞

調査１、調査２のそれぞれ面接の逐語記録を起こして発話データとし、聴取・視聴した音楽について対象者が着目した特徴を示す意味内容ごとに区切った。スペイン民謡の聴取（調査１）とインドネシア「ゲンジェ」の視聴（調査２）による、対象者の「御柱・木遣

表１．「御柱・木遣り歌」の経験

対象者	御柱祭での役割	演奏してきた年数	練習期間	これまでの「御柱・木遣り歌」の体験
A	連長	今年のみ	御柱祭前の２ヶ月間	７年に一度の御柱祭は、幼少の頃から見てきている。よく覚えているのはここ２回。
B	連長(年長)	７年前の次年長の時、今年	２月終わりから毎週土曜日(約３ヶ月間)	小さい頃から。２～３回覚えていて、木遣り歌を聴いてきている。
C	昨年度連長	去年と今年	４ヶ月間	小さい頃から。よく覚えているのはここ２回。

り歌」に関する気づき、ならびに、ものの見方の更新に関わる言及を抜き出し、分析の対象とした。先に区切られた意味内容より似たもの同士をまとめた。

分析の視点として、①気づきを促した音楽の特徴（異文化および自文化における音楽のどのような音楽の特徴によって気づきが促されたのか）、②自文化への気づき（異文化にふれ自文化についてどのような気づきを高めたのか）、③ものの見方の更新（自分自身もしくは相手に対するどのようなものの見方の更新が行われたのか）、以上の３点を設定した。

３　結　果

⑴　調査１

「御柱・木遣り歌」と音楽的な特徴の共通性がみられるスペイン民謡の聴取によって、すべての対象者が「御柱・木遣り歌」について想起することができ、これに基づいて、スペイン民謡についての共通点や相違点について述べることが出来た。

①気づきを促した音楽の特徴（調査１）

気づきを促した音楽の特徴について、対応した発言の例を引用した（表２）。取り上げたスペイン民謡の音楽的な特徴として、「曲や演奏の形式（掛け合い・パルランド）」、「メロディーの特徴（ふしまわし・こぶし・フレーズの長さ）」、「声の特徴（音の高低・性別）」がみられた。

②自文化への気づき（調査１）

自文化について想起した状況および知識について表した名称とともに、対応した発言の例を引用した（表３）。対象者は、「御柱・木遣り歌」の音楽的な特徴について想起しながらスペイン民謡との共通点や相違点を挙げたが、この際、自分の実践経験（実際の自分の演奏場面や実在の人物などリアルな体験、ならびにこれらに伴う知識）を想起していることが分かる。対象者が異文化の音楽理解の手だてとして想起した内容には、「実践場面の状況」、「実践経験による知識」、「実際の人物の演奏場面」がみられた。

③ものの見方の更新（調査１）

聴取後の感想より、ものの見方の更新について、対応した発言の例を引用した（表４）。対象者は、聴いた感じが似ているスペイン民謡の聴取によって、心的変化が表われた。「御柱・木遣り歌」と似ていることに意外性を感じたり、遠い外国と思っていた音楽文化には意外にも自分の表現に近いものがあることを知り好印象を持つなど、心的変化を確認することが出来た。聴取後のものの見方の更新として、「好印象（類似性・共通性）」、「共通点の認識」、「意外性（自分と近い・初めて知った）」、「興味関心の広がり（もっと聴いてみたい）」、などがみられた。

表２．気づきを促した音楽の特徴（調査１）

	音楽的な特徴	発言の引用の例（カッコ内は発言者を表している）
１曲目	曲や演奏の形式（掛け合い、パルランド）	近いね。木遣りやってる途中でかけ声あるんじゃん、周りから。一人で（木遣り）やってて、で周りからかけ声が入るから。(A)
		リーディング的ってあの、語りかけるような、歌詞を歌ってるっていうより、物語を歌ってるっていう感じ。(C)
	声の特徴（高さ）	俺これこの辺の木遣りのどっかとってきた（録音してきた）かと思った。入りだしがね、男の人が高い声で入ってくるんだよね。(B)
	メロディーの特徴（ふしまわし）	一応決まってる訳さ。リズムとかふしは。そこにだから最終的に言葉を無理矢理つめるって場面もあるっつうかさ、そういう感じかな。決まったふしの中に言葉を入れて、伝えたい言葉ってあるじゃん。(C)
２曲目	メロディーの特徴（こぶし）	あーーーみたいのあるじゃん、ああいうのが似てる。俺には出来ないんだけど、木遣り師はうまいんだよね。（木遣り師なら）できそう。(A)
	メロディーの特徴（フレーズの長さ）	ちょっと伸ばしすぎかな。そのつどつど。最後の方とかうんとけっこう伸ばしてるじゃん。あんまりそこまで伸ばしたりしないんで。(B)
	声の特徴（性別）	性別は違うよね。俺らのところはない（女性）からね。(A)

表３．自文化への気づき（調査１）

想起した状況および知識	発言の引用の例（カッコ内は発言者を表している）
実践場面の状況	近いね。木遣りやってる途中でかけ声あるんじゃん、周りから。一人で（木遣り）やってて、で周りからかけ声が入るから。(A)
実践経験による知識	一応決まってる訳さ。リズムとかふしは。そこにだから最終的に言葉を無理矢理つめるって場面もあるっつうかさ、そういう感じかな。決まったふしの中に言葉を入れて、伝えたい言葉ってあるじゃん。(C) 性別は違うよね。俺らのところはない（女性）からね。(A)
実際の人物の演奏場面	あーーーみたいのあるじゃん、ああいうのが似てる。俺には出来ないんだけど、木遣り師はうまいんだよね。（木遣り師なら）できそう。(A)

表４．ものの見方の更新（調査１）

心的変化	発言の引用の例（カッコ内は発言者を表している）
好印象 （似ている、共通性）	何か似てるっぽいっていうのが。好印象ですね。そりゃ自分のやってるものと近いってのは、何かいいじゃん。(A)
共通点の認識	民謡的なものはなんとなく共通点っていうか、ほのぼのしたものがあるよね。なんか激しいんじゃなくて田舎を思い浮かべるような。日本の民謡との共通点を感じた。田舎っぽいという点で。(B)
意外性を感じる （自分と近い、初めて知った）	割と（自分と）近い。遠いっていうか外国の音楽っていうイメージもっちゃってるっていうか。日本の音楽とは全く違うっていうか。もっとCDだとかラジオからだとかメディアからしか得ない情報って感じかな。だからそれで今聞いて初めて知ったって感じ。(C)
興味関心の広がり（もっと聴いてみたい）	もっと聴いてみたい。似てるものも似てないものも。こんなとこ（スペイン）の音楽なかなか聴く時ないじゃん。(A)

⑵　調査２

音楽の社会的・文化的脈絡に共通性が認められるインドネシア「ゲンジェ」の視聴によって、すべての対象者が「御柱・木遣り歌」について想起することができ、共通点や相違点について述べることができた。

①気づきを促した音楽の特徴（調査２）

音楽の社会的・文化的脈絡の特徴を示す名称を挙げ、対応した発言の例を引用した（表５）。＜ゲンジェ＞における音楽の社会的・文化的脈絡の特徴として、「社会的機能（宴会芸、酒と歌、娯楽、共通の楽しみ）」、「非言語的なコミュニケーション（動き、掛け声）」、「伝承（歌詞、ふしまわし）」、「自己表現（歌詞、歌、動き、個性の表出）」、「心的作用（楽しい、親近感、連帯感、尊敬、好感）」、「人の認識（個性、評価）」、演奏形態（円陣）、「役割分担（ソロ、合いの手）」がみられた。

②自文化への気づき（調査２）

自文化への気づきに関する特徴を挙げ、対応した発言の例を引用した（表６）。対象者は、「御柱・木遣り歌」の社会的・文化的脈絡について想起しながら、＜ゲンジェ＞との共通点や相違点を挙げたが、この際、調査１の場合と同様に、自分の実践経験（実際の自分の演奏場面や実在の人物などリアルな体験、ならびにこれらに伴う知識）を想起していることが確認された。対象者が想起した内容とは、「実践場面の状況」、「実践経験による知識」、「実際の人物の演奏場面」であった。

③ものの見方の更新（調査２）

映像の視聴後の感想より、ものの見方に更新に関する、対応した発言の例を引用した（表７）。対象者は、音楽の社会的・文化的脈絡に共通性がみられる＜ゲンジェ＞の演奏の視聴によって、「御柱・木遣り歌」との共通性やゲンジェを実践している人々への共感を抱くなど心的変化を確認することが出来た。聴取後のものの見方の更新として、「好印象」、「共通点の認識（社会的機能）」、「意外性（面白い・イメージとの違い・類似性）」、「音楽の多様性の認識（身近な音楽との違い）」などがみられた。

表５．気づきを促した音楽の特徴（調査２）

音楽的な特徴および社会的・文化的脈絡	発言の引用の例（カッコ内は発言者を表している）
社会的機能 （宴会芸、酒と歌、娯楽、共通の楽しみ）	酒はつきものだね。みんなでわいわいやってるのも一緒だし。練習の時だって、そりゃ一人はやってる（歌ってる）けど、それに合わせてみんなでわいわいやるからさ。こんな（ゲンジェ）感じだよ。飲んで大騒ぎ。(A) 木遣りも若いしょうから年寄りのしょうまで集まって、地区の。(B)
非言語的なコミュニケーション（動き、掛け声）	木遣りの文句で言ったことに対して木遣りの文句で返したりとか、そうやって飲んだりしてるから。(B) ソロの人がいて、そーいそいってみんなで掛け声をするっていう、知らない奴も一緒になってね。(C)
伝承（歌詞、ふしまわし）	ずっとうちの親父が年長やったころからずっと続いてるから、長いね。年代をこえて同じふしまわしの歌だよね。これも多分そういうのなんじゃないのかな(B)
自己表現 （歌詞、動き、個性の表出）	動きもそうだし、歌の文句だね。個性を出したい。(A)
心的作用 （親近感、連帯感、尊敬、好感、楽しい）	普段みんなほとんど知らない人だった。知らない間に仲良くなってるよ。木遣りやって騒いだりして、近づきやすいっていうか。(A) そりゃ木遣り師見りゃうめえなーとか思うよ。ああいう風に歌ってみたいな、っていうのはありましたよ。(B) 連帯感はあるね。やっぱりこういう仲間で歌って飲んでやって。(A) 好感は持つね。やっぱ言葉ってさ、そいつの性格表したりするところあってさ、全然知らなかった奴でも仲良くなるっていうか、同じことをやったっていうことが強みじゃないかな。(C) 楽しもうってことだね、楽しくないと意味ないっていうか。(C)
人の認識 （個性、評価）	親子三代で歌ってるからね、そういうの聞いてるとね、似てる節回しが。親子で似てる。(B) 個性は聞いてる、だから個性がある奴の方が盛り上がる、うまい下手っていうよりも個性、個性出た方が、おおーってなる。(C) あのおっさんいい声するな、ってそういう見方はしたね。歌にも出るよ人生の重みが、っていう感じかな。これ（ゲンジェ）も出るでしょ。(C)
演奏形態 （円陣）	こうまあるく集まって。円陣組んでっていうか、みんなでこう集まって楽しんでるっていうそういう部分は一緒じゃないかな。(B)
役割分担 （ソロ、合いの手など）	（ゲンジェ）掛け声かけてる人もいればさ、ずっと歌ってる人がいるじゃん。（木遣りでも）得意分野っていうかさ、合いの手で囃してる方が楽しい人って絶対いるんだよね、それとソロで歌う方が楽しい人って分かれるからさ、そういうもんでしょ。(C)

表６．自文化への気づき（調査２）

想起した状況および知識など	発言の引用の例（カッコ内は発言者を表している）
実践場面の状況	御柱の会議で新年会とかやると、おっさんとかがやり始めるんだよ。そうすると青年もやれってことになって。飲みにはつきものだね。(A)
実践経験による知識	木遣りも決まった動きがあるんだよ。三回まわしてひいて、一回まわしてまえに出る。(B)
実際の人物の演奏場面	奴のはすごいよかったね、言葉だよあいつは、木遣り的にはあんまりうまくないっつうか、声はあんまり良くないんだけど、でも言葉とかその出し方とかあいつ独特のやり方があってさ、それやっぱ個性が出ないと木遣りって面白くないからさ。(C)

表７．ものの見方の更新（調査２）

心的変化	発言の引用の例（カッコ内は発言者を表している）
共通点の認識 （社会的機能）	やっぱ飲んで歌えばみんな一緒。（気持ちは）分かるよ。飲んで騒いでれば面白いでしょ。(A) 楽しみ方が一緒。一緒に円つくってやってれば（彼らと）楽しめるような気がするけど。(B) 世界共通だと思う。酒飲んで、みんなで楽しもうぜっていう。楽しむための手段で自然に音楽を使っちゃってるって感じで、生活にしてるっていうか身近にしてるっていうか。(C)
意外性 （面白い、イメージとの違い、類似性）	他の国の音楽なんてね、まだ洋楽だったら聴く機会があるけど、他の国の伝統的な歌とかさ、聴くことないじゃん。意外と面白いね。イメージしてたことと違うことがあるよね。木遣りっぽいものもあって。(A) 他に似てるものがあるとかそんなことは全然考えなかったですね。(B) 以外と似たような、類似したものがあるんだっていうような。(C)
音楽の多様性の認識 （身近な音楽との違い）	いろんな音楽がありますね。普段きいてるものと全然違うからね。(A)

４　考　察

対象者にとって異文化の音楽である、スペイン民謡の聴取（調査１）、インドネシアの歌の宴会芸＜ゲンジェ＞の演奏場面の視聴（調査２）により、対象者は自文化について詳細に想起していた。

気づきを促した音楽の特徴として、以下が挙げられた。音楽的な特徴としては、曲や演奏の形式（掛け合い、パルランド）、声の特徴（高さ、性別）、メロディーの特徴（ふしまわし、こぶし、フレーズの長さ）、などがみられた。音楽の社会的・文化的脈絡に関しては、社会的機能（宴会芸、酒と歌、娯楽、共通の楽しみ）、非言語的なコミュニケーション（動き、掛け声）、伝承（歌詞、ふしまわし）、自己表現（歌詞、動き、個性の表出）、心的作用（親近感、連帯感、尊敬、好感、楽しい）、人の認識（個性、評価）、演奏形態（円陣）、役割分担（ソロ、合いの手）、などがみられた。

このような音楽の特徴の共通性に着目することを契機として、自分の演奏場面における自己の表現方法や知識、自分と音楽との関わりなどについて気づきを高めた。実践場面の状況、実践経験による知識、実際の人物の演奏場面などを詳細に想起しながら、自分について、自分と音楽との関わりについて考えをめぐらせる機会を得た。これに基づき、スペイン民謡および＜ゲンジェ＞がどう類似または相違しているのか、ということについて判断をすすめていった。

自文化への気づきと異文化に対する共通点や相違点の認識に伴い、相手に対する好印象を抱いたり、意外性（自分と近い、初めて知った、イメージとの違い）を感じたり、興味関心の広がり（もっと聴いてみたい）、音楽の多様性の認識（身近な音楽との違い）など、自分のこれまでのものの見方を更新する機会となったことが認められた。

こうした自文化への気づきと異文化に対する認識はほぼ同時進行的に行われ、自文化への気づきを契機として、異文化への理解をすすめた。この際、自己の経験を詳細に想起させ、自らのリアルな体験やそれに伴って得られた知識に照らし合わせることにより、自分と相手との一致点または不一致点について、実感することが出来たと考えられる。結果として、自分自身のものの見方の更新を可能にしたと考えられる。

５　まとめと今後の課題

本研究においては、従来の音楽による異文化理解の方法に関する研究において、異文化にふれる作用としての心の動きに関する実証的研究ならびに理論的根拠がみられていないという課題に基づき、異文化の音楽の作用としての自文化への気づき、ものの見方の更新について検討した。対象者が、自分と相手が近いととらえるカテゴリー幅を拡大するためには、共通点や類似点がみられる音楽にふれ、共通点の認識を契機とし

て、自分と相手のどこが類似し相違しているか、ということに考えをめぐらせるプロセスが有効であることが明らかになった。この方法を、音楽を通した異文化理解の一方法として提案したい。

本研究においては、年代の同じ３名の対象者を対象とし、取り上げた音楽経験は「御柱・木遣り歌」に限られている。また世界の様々な音楽の特徴は非常に多様性に富み、音楽文化それぞれにおいて独自性がみられるものであるが、本研究においてはそのほんの一部を調査対象として取り上げた過ぎない。今後、調査における対象者の年代や取り上げる音楽経験、また出会わせる音楽の特徴などを考慮しながら、音楽を通した異文化理解の方法について、より詳細に検討していきたい。

【註】

⑴　本研究の一部は、日本音楽教育学会第36回大会において発表された。

⑵　近年、世界の諸民族の音楽を教材とする場合に、多文化音楽教育（Multicultural Music Education）と呼ばれ始めている。アメリカ合衆国の音楽教育学者P.S.キャンベルが提唱している概念であり、世界の様々な音楽への理解をすすめる教育（World Music Education）、国内のマイノリティの音楽への理解をすすめる教育（Multiethnic Music Education）、という二つの概念を含んでいる。

⑶　マヌエル・ガルシア・マトス『スペイン民俗音楽体系』（CD）より選曲した。解説書において、スペイン民謡の特徴について説明されている（pp.23－26）。

⑷　『アジアの音楽と文化 第２巻 音のなかの文化～声の社会学～』（DVD）に編集された映像を取り上げた。この音楽的な特徴や音楽の社会的・文化的脈絡などに関して、付属の解説書において説明されている（p.31）。

⑸　アラン・メリアムによる、10の主要な音楽の機能（１．情動的表現、２．美的楽しみ、３．娯楽、４．コミュニケーション、５．シンボリックな表現、６．身体的反応、７．社会的規範への服従の強化、８．社会制度と宗教的儀式の有効化、９．文化の持続性と安定性への貢献、10. 社会の統合への貢献）を参考に、＜ゲンジェ＞の特徴について読み取り、手がかりとなるキーワードを挙げた。（以下の著書において検討されている。ルードルフ・E. ラドシー；J. デーヴィッド・ボイル（著）；徳丸吉彦他（訳）1985　『音楽行動の心理学』　東京：音楽之友社）

【文献】

・内田素子　「思考法としての異文化理解　―中学校音楽科カリキュラムの再構築のために―」日本音楽教育学会（編）　『音楽教育学研究２』　東京：音楽之友社　pp.175－184　2000

・加藤富美子　「音楽における異文化理解の構図⑴」　『音楽教育学』　第23－２号　pp.24－26　1993　「オルティンドーと江差追分　―音楽を通した他者理解の可能性と方法」　赤司英一郎；荻野文隆；松岡榮志（編）　『多言語・多文化社会へのまなざし』　東京：白帝社　pp.253－264　2008

・桐原　礼　「異文化理解をめざした音楽学習のプロセス　―アジア諸国の箏類の鑑賞学習を例として―」　『音楽教育実践ジャーナルvol.２ no.２』　日本音楽教育学会　pp.57－63　2005　「異文化の音楽の理解の方法に関する一考察　―自文化の音楽への気づきを高めるために」　『学校教育学研究論集第』13号　東京学芸大学連合学校教育学研究科　pp.143－160　2006

・小池浩子　「異なる文化のとらえ方・接し方：異文化の理解」八代京子；町恵理子；小池浩子；磯貝友子（著）　『異文化トレーニング　―ボーダレス社会を生きる』　東京：三修社　pp.203－240　1999

・佐藤郡衛　『改訂新版　国際化と教育』　東京：放送大学出版会　2003

・谷正人　「異文化理解における「わかりにくさ」の効用　―わからない自分への気付きへ」　『音楽教育学』第37-2号　日本音楽教育学会　pp.1－12　2007

・箕浦康子　『文化のなかの子ども』　東京：東京大学出版会　1990　「文化心理学における<意味>」　柏木恵子；北山忍；東洋（編）　『文化心理学』　東京：東京大学出版会　pp.44－63　1997

・山口修；加藤富美子；川口明子（監）　『必携・新しい“世界の音楽”学習の手引き　アジアの音楽と文化　解説書』　東京：ビクターエンタテインメント　1998

・渡辺文夫　『異文化と関わる心理学』　東京：サイエンス社　2002